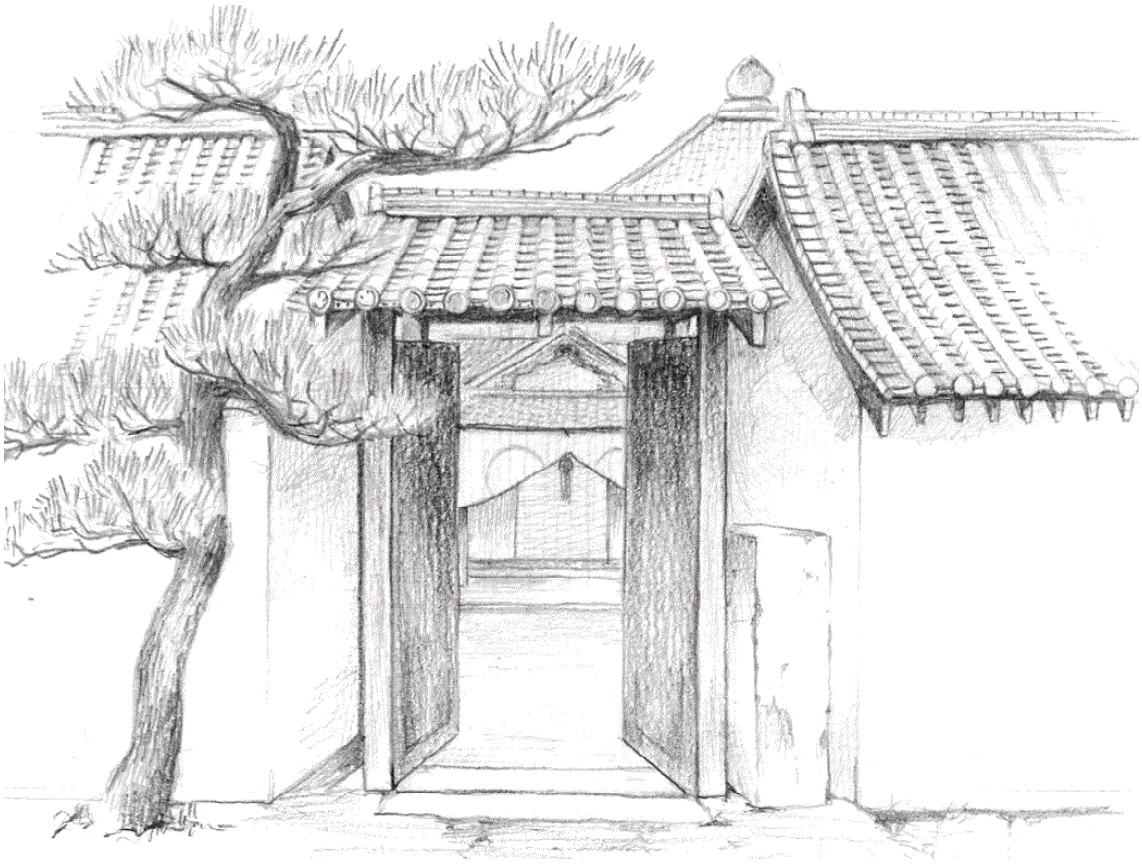
かさおか

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311
FAX 66−1314



八幡平の敬業館
（往時を想像して）

をやの思いを にをいがけ、
内治(うちうち)に心を配り おたすけに誠の心を尽くそう

1．一歩前進 百万軒
2．おつとめの徹底と ひのきしん
3．機を逃さず おさづけの取次

表紙のことば

称念寺橋からものの五百メートル、隅田川に沿って北に正寿場町（しょうじばちょう）を抜けると敬業館が在る。笠岡市教育委員会の資料によれば、寛政十年（１７９８年）に開かれた教育施設。六百四十八平方メートルの敷地に講堂一棟、塾舎二棟、教授居宅一棟が建っていたとある。明治十六年閉鎖され、この頃代々教授方を勤めていた小寺家の持家であった。

笠岡大教会年表によれば、明治二十一年八月　この頃参拝者多く、協議の結果、殿川町の塚本信斐氏所有の家屋を借り受け信徒寄所とする。更に明治二十二年五月二十二日　元の笠岡郷校敬業館（八幡道　小寺福一郎氏持家）を買受け、集談所とする。上原家もここに移る、とある。明治十九年六月、初代の帰郷と共に、笠岡の道は芽吹くが、その勢いは将に燎原に火を放つが如くであった。笠岡大教会史を読んでみる。当時一人の信者が納める教費金は五厘であった。教会本部への納金から推察する信者数を次の如く記している。明治二十年　百二十二人余　明治二十二年二月　三百九十五人　明治二十二年九月五百三十五人。上原家を訪れる人々は引きもきらず、家族はゆっくり夜も眠れないという状態、このため協議の結果、殿川町洲崎に寄所を設け、四十人ほどの主だった人が交替で、集まる人々に話を取り次いだ。それでも依然として称念寺橋の上原家には、毎日のようにおたすけを願う人々が集まるので、結局上原佐吉、さとは、話を取り次いでは寄所へ送って行く、帰ってみれば、また新たな人が来ているという具合で、衆議一決、元の敬業館を購入して、上原家もここへ移転した。

この間、明治二十一年三月四日、さとに笠岡警察署から呼び出しがあった。数多くの人々が上原家に出入りするのを、当局が不審に感じたのである。さとは尋問に筋の通った明快な受け答えをして、拘留もなく帰宅した。そして四日後の三月八日、おぢばで執り行われた教祖一年祭に、備中眞明組を代表して参列した。

こうして明治二十四年十月十一日　敬業館の建物を内部改造して、上原さとを初代会長に笠岡支教会が設立された。その後も教会教勢は留まる処を知らず、翌二十五年には玉島、福山、高屋、神邉の四名称が部内教会として誕生した。

明治二十七年、笠岡支教会に、本席・飯降伊蔵先生の御入込を頂いたが、この時は門から玄関まで赤絨毯を敷いてお迎えしたという。本席様は船をあまり好まれなかった。高知へ御巡教されるのに、神戸の兵神に寄り、陸路を通られるとの事で、初代はおぢばに帰り、笠岡への御入込みをお願いした。初代はこの時の御本部での様子を次のように述べている。

私いよいよおぢばまでお迎えに行った。そして島村さん（高知分教会長）に会ってその事を頼むと、フンフンと表の間では返事をしていても、ツーと行って次の間で桝井さんに、岡山から船で高松へ渡るような相談をしている。そやから私、こらどうもならんと、すぐに井筒つぁん（芦津分教会長）に、「私こうしてお迎えに来ているのに、島村さん岡山から船に乗られるように言うていますが、うちには畳の表替から壁の上塗り、布団も新たに拵えたし、夜昼通してやっていますのに、お立ち寄りが願われねばどうもなりません。あんたから、どうぞそう言うて頼んで下され」と言うと、井筒つぁんが、御本席様に聞こえるところで、そう言うて頼んで下さった。それじゃ笠岡へも寄ろうと言うて、お立ち寄り下さる事になった。

翌年さとは上原伊助に会長職を譲るが、女の身で錚々たる当時の各地の初代会長に伍して笠岡の道に大きな素晴らしい弥栄をプレゼントしてくれたものと、涙を禁じ得ない。

（史料部長　上原繁道）

春季大祭講話

全よふぼくが初席者一名の御守護をいただこう

大教会長様

実のをやなればこその親心

本日は春の大祭ということで、祭文にも、明治二十年までの親のはたらきを述べ、それに対する御礼を申し上げました。

いろんな道具を寄せて私たち人間を創造され、守護を教え、八千八度の生まれ変わりをして、大変なご苦労をなされて、お育てくださる親神様は、ただ人間を造って育てただけではなく、天保九年には、教祖を月日のやしろと定められて、直々にこの世の表に現われて、陽気ぐらしに向かうひながたを示されました。正しく親なればこその本当の親心でありましょう。

「神」と言えば、どうしても、怖いもの、言うことを聴かなければ滅ぼされるというような観念で捉えてしまいがちですが、私たちが信仰しているのは実のをやであります。

可愛い一条の親心でありますから、直々に、地上に現れて下さって、自ら陽気ぐらしに向かうひながたをわざわざ示されているということは、本当に有難い親心だと思います。

ところが、ひながたをお示しいただきながら、目の前の生神様に甘え、自らが陽気ぐらしを求めてひながたを辿ろうとしなかったので、自発性を促すべく、二十五年先の定命を縮めて、明治二十年に御身をお隠しなされました。これも有難い親心です。

そういう一つひとつが、単なる御守護ではなく、世界一列をたすけたてやりたいという親心いっぱいのお姿ですから、大祭には、その親心にしっかりと御礼を申し上げるのです。

お連れ通りくださる成人の道

それに対して私たちもそのご恩に応えるべく日々は、朝夕に御礼申し上げつつ、お導きのままに世界だすけの御用の上に勇んでつとめ励んでおりますが、自分が勝手にご恩報じの道を歩んでいるというよりは、むしろ、親神様が手を引いてお導きくださっているということも有難いことです。

ともすれば、日々のにをいがけ・おたすけも自分がしている、自分がこの人をたすけたから自分の信者だというような思い違いから、いろんな事情が起こってきているのも、今の一つの時代の姿です。

にをいがけ自体は、私たちがしなければなりませんが、にをいをかけるのも、おぢばにお連れ帰りするのも、これは親神様・教祖が導いてお引き寄せくださるのであって、私達は、親神様・教祖が導かれた人を丹精しているのです。

主は親神様・教祖であって、自分が主になる信仰をしたのでは、本来の信仰にはなり得ません。

本日の大祭は、おぢばに理の運びをして、お許しを頂いてつとめているおつとめ、二十六日におぢばでつとめられるつとめの理を戴いてのおつとめであります。

大祭は、大祭としての理の運びをしてつとめているのです。勝手につとめているのではありません。

そして、みんなで真実を込めて御礼を申し上げています。それぞれが理作り・理立てをしながら、忙しい中を、わざわざ、今日ここまでお礼に上がった。正しく真実込めてのお礼をしているのです。

残念立腹に見られる親心

さて、教祖百二十年祭に向かっていよいよ仕上げの年の本年は、どういう心でつとめたらよいのでしょうか。

昨年から今年にかけて、大きな天災の姿を見ましたが、『おふでさき』に「月日の残念立腹」と示されるように、私たち人類に対する残念立腹の姿です。

十全の守護を頂戴しながら、日々にその喜び・感謝の気持ちのある人が、果たしてどれだけいるかと改めて考えると、お道を信仰しているお互いでさえ、つい忘れてしまうのではないでしょうか。

身の回りに溢れている御守護の一つひとつを日々に感じながら生きているかと考えると、まだまだ感謝の気持ちが足りないのではないでしょうか。

それに対するご恩報じとして、お尽くしをしたり、ひのきしんをしたりしていますが、まだまだ気持ちが足らないのではないでしょうか。

そういうことに対する残念立腹もあるでしょうが、この残念立腹の姿は今年だけではありません。百十年祭の仕上げの年にも阪神大震災という形で現われました。

今回は二年目、一年早まっているわけです。それから考えると、残念立腹がより増しているとも言えるわけで、何れにしても年祭の旬に見せられた大きな残念立腹と考えれば、全人類に対することもさることながら、それ以上によふぼくに対する残念立腹という思いが強いと思案しなければ、申し訳ないと思います。

それでは、よふぼくに対する残念立腹とは何かと考えると、それは、成人の鈍さです。

今、全てのよふぼくが、よふぼくとしての自覚に立って御恩報じの道を歩んでいるでしょうか、よふぼくのつとめを果たしているでしょうか。

百年祭を一つの大きな節目として、よふぼくが大きく成人するための節として、十年毎に年祭をお与えくださっていますが、全然成人していないことはないでしょうか。

成人の心作り・成人の歩みを、しっかりとしなければならないと改めて思います。

結果が出るように実動する

では、如何に成人するのでしょうか。

「実動」そのものに重きをおいた年祭活動から、実動によって「結果」を出す活動とすべく、全教会一名以上の初席者を御守護いただこうと申し合わせました。

過去二年は、実践項目を掲げて歩んで参りました。それは実動する――にをいがけをする、おたすけをする――ことが目的でした。それに対しては、皆さん方充分につとめられたと思います。

しかしながら、この年祭の旬に、成人はそれだけでいいのでしょうか。

殆ど動かなかった人も、少しでもにをいがけに歩いてくれるようになった、おさづけを取り次がなかった人が、この旬に取り次ぐようになった、これだけでも私は充分成人した姿だと思いますが、親神様に本当にお喜びいただけるような姿にするためには、それを通して、結果を出さなければならないと思います。

しっかりと歩いて、にをいがけ・おたすけをし、ひのきしんもしたら、その結果が出なければ、本当の意味での成人の姿にはならないということです。

その上から、全教会一名以上の初席者をご守護いただこうと申し合わせました。

全よふぼくが実動しよう

従来は、「教会で初席者何名」ということになると、「会長さん、宜しく。奥さん、宜しく。あんた頼むで。」と人任せにしてしまって、よふぼ

く一人ひとりがその思いで動いていないという現実もあったでしょう。

教会で初席者一名以上という打ち出しならば、むしろ「よし、よふぼくとして自分が、この教会に初席者一名を必ず御守護いただこう」という思いにならなければ、本当の意味での成人には繋がってこないのではないでしょうか。

「全教会で初席者一名以上」と打ち出したから、「一名」でいいというのではありません。一名以上というところに重きをおいて、しっかりつとめなければならないと思います。

考えて見れば、『諭達第二号』は教会に対して発布されたものではありません。「さあ、全よふぼくが人をたすける心の涵養と実践をしよう」と、発布されたのが『諭達第二号』の精神であります。

ですから、全よふぼくが必ず初席者一名を御守護いただくという思いでつとめ切らなければ、諭達の精神にも反し、よふぼくの成人を望まれて年祭をつけてくださったをやの思いにも添うことができません。

年祭は、よふぼくが、よふぼくとして成人する旬であります。実動を通して、一人でも多くの方におぢばに帰っていただき、初席を運んでいただけるように丹精をする、また、そのための苦労をするところに大きな心の成人ができる、その心の成人を親神様・教祖がお喜び下さる。そしてそれこそが大きな御恩報じになるということをしっかりと心において、残る一年、精一杯つとめ切りたいと思います。

本来のよふぼくのつとめ

成って来る理の全ては、私達をたすけてやりたい、陽気ぐらしへ導いてやりたいという親心がかかった理であります。それをしっかりと思案し、どう、そのをやの思いに応えるかをしっかり思案して、明治二十年に一れつ子供の陽気ぐらしをよふぼくに託された親心に応えましょう。

確かにお道の成人の段階には色々とあります。先ず、教会へ日参するところから始まる。お尽くしをする、おぢばがえりをする、別席を運ぶ順序があります。

しかしながら、それらが目的ではなく、それらを通して人だすけをできる人間に作り上げていくところに、本当のお道を歩む意味があるのです。よふぼくとしての使命はそこにあるということです。

尽くし・運びをしたら、よふぼくのつとめができたというのではありません。本来のよふぼくは、人をたすける人間を作り上げて、初めて、よふぼくとしての御用が果たせたということになるのです。

そういうよふぼくに全よふぼくがなって欲しいと、親神様が示された今の旬であるということ、これをしっかりと思案して、今年一年つとめたいと思います。

全よふぼくが初席者一名以上必ず御守護いただきましょう。

どうぞ宜しくお願い致します。

《以上要約》

婦人会 全委員部長講習会

婦人会では、去る一月二十三日(日)、「全委員部長講習会」を開催しました。これは、三年に一度の全委員部長講習会を開催するにあたり、教祖百二十年祭三年千日仕上げの年に入り、一日でも早く、本会からお打ち出し頂いた事柄、支部としての支部長様の思いを伝えさせて頂き、年祭までの最後の年を、足並みを揃えて前進させて頂きたいと、寒い時期、年頭ではありましたが、計百九名の委員部長さん方の参加を頂きつとめさせて頂きました。

当日は、午前十時半より開講し、支部長様より、「年祭の旬というのは、非常時である。寝ても覚めても、教祖にお喜び頂ける方向に向かわせて頂かなければいけないのです。」と懇々とお話し頂きました。その後、二人の委員部長による、本年の活動指針である『育て』をテーマに感話、本部三日講習会案内のビデオ鑑賞、昼食、午後からは、六～七名、十六班に分かれて練り合いをもちました。各々の持ち場立ち場の上から、様々な意見が出て時の経つのも忘れて、あちこちの部屋から談笑する声が聞かれました。その後、閉講、神殿にて、支部長様を芯に、それぞれの心定めを教祖に御供して皆揃っておつとめをつとめさせて頂き、散会致しました。遠近とわずご参加下さいました委員部長さん、又留守をお預かり下さいました皆様方に、心より御礼申し上げます。

（常任委員　門脇加津）

教祖に思いを寄せて

興明分教会　吉岡八恵

昨年十二月に委員部長という立場を頂きました。それまで母にもたれて通らせて頂いていた私には、思いがけない重責を担うこととなりました。

そう思っていた矢先の全委員部長講習会参加でした。本当に風の強いしんしんと冷える日であったように思います。後継者講習会とは異なり、整然と机が並べてある講堂に入った瞬間から凛とした緊張感が漲ってきました。

支部長様のお話に始まり、感話を聞かせて頂き、班ごとにねりあいをさせて頂きました。

感話・ねりあいのテーマの一つは、私にとってずっと気にかかっている婦人会の例会についてという事もあり、まさにタイムリーなものでした。

その中で、後継者講習会においても聞かせて頂いたお道の婦人像についてのお話は、耳の痛いものでした。私とは正反対であり同性の者もあこがれる婦人像、それはまさしく教祖であると思います。

志は高く、そんな教祖に少しでも近づきたいと思いつつ、現実にはとても容易な事ではありませんが、教祖ならこんな時どうなさるのか、どんな言葉をかけられるのかと、教祖の事を考える時間(とき)を少しでも長く持たせて頂くよう心がけてゆきたいです。

講習会に参加させて頂いて、心の底から湧いてくる熱い力のようなものをおみやげに頂きました。

教会へ帰って夕づとめ後、折しもなかなかそろってゆっくりと話すことのできない一番身近な二人のご婦人の方達と、ねりあいの続きのような形で、一時間ほどお話させて頂きました。これも親神さまのお計らいかなと、とても嬉しかったです。

最近、感動が人を変えるという話を聞かせて頂きましたが、この熱い思いを忘れずに教祖百二十年祭に向かって歩ませて頂きたいと思います。

私宛の速達便

芦品分教会　吉岡晴代

一月二十二日の夕方、車から降りた瞬間、腰に激痛が走りました。会長も大丈夫かと心配します。その後、痛みは治まるどころか、だんだんひどくなるばかり。明日の婦人会委員部長講習会に行けるだろうか、との不安が過りました。この講習会は、教祖百二十年祭活動仕上げの年の今年の、婦人会最初の大切な行事。明日は何とか出席したい、と心密かに決め、一抹の不安は有りましたが休みました。

次の日の朝、何とか体を動かすことが出来、大教会へと向かいました。どうして今日の日に合わせた様に、今迄なったこともない腰痛になったのだろう。支部長様のお話しを聞かせて頂いている内に、ついつい自分の基準で周りを見てしまったり、やる前からあれこれ考える自分に気が付きました。

感話では、地道にこつこつ積み重ねることの大切さを、ねりあいでは、親達の伏せ込みのおかげで今日があるんだということを、改めて感じました。

私達夫婦は、教祖九十年祭活動中の年に結婚しました。教祖百年祭活動中の年には、主人の父である前会長が突然倒れ、主人が会長にならせて頂きました。十年後の教祖百十年祭活動中の年は、真柱様(現 前真柱様)が芦品分教会に御巡教下さり、私達に親しくお声をおかけ下さいまして、勇ませて下さいました。年祭活動の期間ごとに、大きな御守護、節がありました。まさに年祭の旬は節目の時である、と思います。

いよいよ今年は、その大事な年祭活動仕上げの年です。私は、この講習会で感じたことをしっかり胸に治め、会長の心に添って、教会の台としてのつとめを地道に続け、少しでも感謝の心、喜びの心の多い、不足心の少ない毎日を通らせて頂かなければ、と決心しました。

腰痛の事ですが、午前中はじっと同じ姿勢をしているのが辛く、もじもじしながら座っていましたが、午後からは少し楽になりました。次の日には、身軽に動ける様になり、数日後にはすっかり良くなりました。まるで講習会の日だけの腰痛の様でした。「この一年、しっかり腰を据えて通りなさいよ」と親神様、教祖が私に手紙を、それも「速達」で下さった様に思います。

日々の心遣い

米美分教会　三代由里

一月二十三日、委員部長講習会が開催されました。昨年の十二月初めに案内のハガキを見て「一月二十三日!?」まず、そう思いました。

今年の冬は暖冬であるとの予報は出ていますが、当教会は大山の中腹にあり、年末から降り出した雪で、お正月には三十センチ程の積雪がありました。一月後半ともなると、はるかに積雪するであろう事は容易に想像が出きたからです。しかし、親からの声です。参加させて頂く様返信致しました。

講習会三日前までは、かなり雪が降っていました。二日前、当日になると『アレ？いい天気…』親の声に素直になると、出にくい中も出やすくして頂けたのです。

まず最初に支部長様にお話を頂きました。女性の役割として『育てる』というお話の中で、私達のお道の婦人としての心遣いについて「日々の生活の中で、教祖の御心に添った心遣いが出来ているでしょうか？」

という問いかけでした。

『こんな時、教祖ならばどうされるのだろう』

『教祖ならば、どんな言葉をかけられるのだろう』

『教祖なら…』　私に一番欠けていた思いへの問いかけでした。思い当たる事情があったのです。我が子の事ではありましたが、まさにこの心遣いに欠けていました。つい感情の方が先走り、正反対な心遣いで叱りつけていたのです、会長様に怒られ、

「何で私が怒られるの？」

などと腹を立てていました。我が子とはいえ将来有望な用木要員です。ただの枯れ木にしてしまう所でした。本当に胸にガツンと痛いお言葉でした。

次に二名の方の感話、午後は十六班に別れての練り合いと続きました。ここでもいろんなお話を聞き、感銘したり反省したりとアッという間の一日でした。

毎日の生活に追われ、時には年祭の仕上げの時旬である事も忘れてしまうような私ですが、支部長様に頂いた『教祖の御心に添った心遣い』を日々の生活の中に求め、年祭に向けての残りの時間を、私に出来る精一杯、勤めさせて頂きます。

後日、マイナス三十度の寒波により降り積もった雪で、広場にあるスベリ台は半分雪の中に埋まってしまいました。(笑)

すべては心がけひとつ

大江橋分教会　村川　久美子

恥ずかしながら、委員部長とは名ばかり。一昨年五月に、婦人会笠岡支部総会(第21回)で、支部長様からの第一声、「不足は切る理です。」というお言葉に、ドキッとし、(これからは喜びさがしを!!)と志したはずなのに……、嬉しくない言葉を発する日々。もう年祭三年目に突入してしまいました。

これまで、(ありがたいなあ。もったいないなあ。)と喜びの声をどれくらい発していたか。日々のあたり前の暮らしの中で、どれだけ喜びを見つけられていたか。

教会の特性をどれだけ生かせていたか。教会はぢばにつながっている所、祈りの場所、神様と向き合う場所、それぞれ帰ってこられた方の力になっていたか。反省だらけです。”年祭の旬は非常時“実動の年だという事。婦人会の活動方針…成人目標に沿う通り方を実行させて頂こうという支部長様からのお話がありました。通り過ぎてしまえば意味がない。今動かなければ、十年祭、二十年先何も変わっていない事になる。流されないよう、今を大切に努力しなければと思うことでした。

御野分教会の奥様の例会のお話は、昨年の委員部長講習会の支部長様のお話から、心を定め、婦人が集まり、少しでもおやさまのお心に近づけるような事をさせて頂こうと月一回の例会を始められたとの事でした。とても身近でわかりやすく前向きになれました。私自身も、(婦人の皆様に相談させて頂こう)と思っています。例会などで、その月のお手振りや鳴り物の練習が心安くできれば、自信になり、月次祭も楽しみになり、笑顔もふえそうです。

輝美濃の奥様は、弟さんの未信仰のお嫁さんを三十年かけて導かれたという嬉しいお話、私ならやめてしまいそうですが、”どんな時も神様だけは離したらいけない“

大きな心で優しく接していらっしゃったご様子が目に浮かび、あきらめず積み重ねられた姿に感動しました。

すべては日常の心がけひとつ、笑顔を、喜びの姿勢をどううつしていけるか。胸から胸へひとつひとつ教えを伝えて下さったおやさまにお喜びいただけるようつとめていきたいものです。

今は非常時!!

福廣分教会　佐々木　靜　子

支部長様は、年祭活動最後の一年を迎えたこの旬を、どの様な心で通ろうと思っているか、今は非常時です、即座に動かねばならない、そこで婦人会活動方針を手を上げて云って下さい、との事。

私は三ッ目が出て来ません。すると

委員部長が活動方針が云えなくて何をするつもりですか

と（論達は云えますが……）。もはや手を上げないのは私一人だヵ。手も顔も上げられず脳ミソは固まってしまいました。

この事は、今の私に大切なものが欠けていることを気付かせて頂きました。

続いての活動方針については心に沁み入るようでした。

求めるとは動く事ですョ、教祖だったらどうされるか常に頭において、伝えるとは、「有難いねェ、うれしいねェ、結構だねェ」と口に出す事です、黙っていては伝わらないですョ。

そして常に人助けを心掛け実践するところ、それが教会、例会ではしっかり諭しあって欲しい、きっと結果がでますョ

と未熟な私にも分りやすくお話し下さったと思います。

毎月第三日曜日の午後は福広婦人会の例会が数十年前から定着しています。

例会では、前委員部長、元委員部長共に健在ですので、アドバイスをいただき乍ら、前半は、お手ふり・三曲・男鳴物の練習、後半は、おふでさき拝読・福山委員会での連絡事項・旬々の報告やお願いをしています。

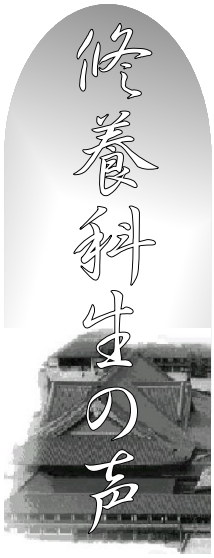
初例会はぜんざいと福引が恒例で、毎月お茶の時は気楽に話し合って楽しく過していますが、娘は「婦人会に行くと、親も教えて呉れなかった事を教わる事が沢山ある。親に云われると腹の立つ事も素直に聞けるし、親の云う事も間違ってなかったとも思い直せる、だって二十代から八十代まで輪になって、コーヒー飲み乍ら話し合える場は、他には無いョ」と云います。

会員さんの中には、遠くは車を乗り継いで一時間半位の所からも集まって下さいます。お迎えする私は、せめて帰られる時は送らせて頂くよう心掛けています。

例会も高齢化してきましたので、おばあちゃんのお泊り会もしましょう、と呼び掛けているところです。

年祭活動最後のこの一年は特に諭し合って欲しいと支部長様のお話でしたので、諭し合いを重ねて、御存命の教祖に喜んで頂けるお土産を一人一人が御守護頂けますように、会員さんと共に頑張らせて頂きます。

御指導よろしくお願い致します。



私と天理教

稲倉分教会　廣田　真也

私は天理教が大好きです。いや、天理教というより、天理教の信仰をしている人や、天理の街そのものが好きです。

このたび、私は修養科第七六四期生として、十二月から二月までの間、おぢばで修養させて貰うことになりました。

私は、物心がついた頃からうちの家は天理教だ

なと思っていました。だから、私の子供の頃の写真を見ると、稲倉の教会とか、おぢばの黒門の前で写した写真がいろいろとあります。私の名前である「真也」というのも稲倉の前会長様につけてもらったそうです。

さて、修養科に入ってからは、最初、ものすごく不安でした。それは大教会に順序参拝に行った時、「今度の修養科入学者は何人ぐらいですか?」と聞いたら、「まだ誰もいません」と言われたので、さびしいなあと、頭が不安でいっぱいになりました。

しかし、十一月二十五日におぢばに帰ってみると、面接の時、修養科生はみんなで三人いますと言われ、少し安心しました。でもあとの二人は、初めて見る人だったので、また少し不安になりました。

いよいよ月が変わって修養科が始まり、最初友達ができるかどうか不安でした。しかし、一週間ぐらい経ったらいろいろな世代の人と楽しく話せるようになり、ようやく不安がなくなりました。

これからの日々は、おてふりと鳴物（特に笛）を頑張ろうと思います。

最後に私は、修養科が修了してからは、二ヶ月ひのきしん隊に入り、続けて検定講習・前期を受けようと思っています。しばらくおぢばにいますので、詰所で皆さんのお帰りをお待ちしております。

修養科に来て

上吉野分教会　松井浩宣

私が修養科に来るきっかけには、特に大きな身上や事情もなく、人生経験の一つぐらいの気持ちで来ました。天理教に関しては、座りづとめができる程度で、ほとんど何も知らずに来ました。

最初に驚かされたのは、詰所の修養科仲間の二人の天理教に対する信仰の自然さでした。授業が早く終わって、回廊ふきをするという発想は私にはなく、詰所に少しでも早く帰ってわずかの間でも休もうという気持ちしか考えられませんでした。何の意味があって回廊ふきをするのか、というような疑いの気持ちを持たないことに最初は少し気味が悪い気持ちもありました。特に修養科に来るまでは意味があるとか、損とか得とか、そういう風に物事を考えていたので不思議でした。

しかし、誘われてやってみると、意外に楽しいものでした。本当に回廊をきれいにするなら、ダスキンのモップでサーッとふいた方が早いし楽ですが、そういうことではないものがあるような気がしました。それはうまく言葉にできないことで、意味とか、損とか得とかの反対の方にあることのような気がしています。

さすがに今は、回廊ふきをすると、あまりにも疲れて、風邪をひいたりして、詰所のひのきしんや修練に支障をきたすおそれがあるので、時間があってもほとんどやっていませんが、二月の終わり頃には、余裕があればやりたいと思っています。

それから次に驚いたのは、本当にいろいろな人たちがここには来ているということでした。小さい頃から天理教に慣れ親しんでいる人から、何も知らされずだまされて連れてこられたのではないかと思えるようなお年寄りまで、そして、その人たちが同じ机で天理教を勉強することが驚きでした。最初はクラス分けする時に、天理教に対する理解度のようなもので、上級者・中級者・初心者みたいな形で分けろよと思いましたが、今はこのいろいろな人たちがいることが大事なのかなと感じています。

最初の一ヶ月はあまりにも覚えなければならないことが多すぎて大変でした。特に詰所での夜の修練は、同期生の二人の足を引っ張っていることが分かっていたので（それに進むのが早くて）、心苦しい思いもありましたし、特にくやしい気持ちもありました。負けたくないという気持ちが勝ちすぎて、まわりをイヤな気持ちにさせたことも多々あったと思います。

二ヶ月目には少し余裕も出てきて、一ヶ月目よりは楽しく過ごせるようになりました。特に修練では、同じクラスの何人かにすごく影響を受けて、おてふりの修練が楽しく感じられるほどになりました。

それからまた、同じクラスの何人かの話でとても感動させられる話を聞き、自分の人生をすごく反省させられたこともありました。

これから、三ヶ月目に入ることになりますが、残りの一ヶ月は少しペースを落として、まわりに気を配れるぐらいの余裕を持ちたいと思っています。

おぢばは行きとうても行かれん所

福勇分教会　鳥井裕子

私は、天理高校を卒業しているので、すでに教人の資格があります。修養科は行かなくてもいいのですが、親やまわりの方々に、いつかは修養科に行った方がいいと言われていました。「いったい自分はいつ行くんだろう？」と思いながら数年ほどたち、あるきっかけで「修養科へ行きたい！」と思い始めました。

「おぢばは行きとうても行かれん所」と聞きます通り、なかなか行ける状態ではありませんでした。車のローン、電話代、教会への月々の御供、保険などのために働いていたので、やめるにやめられず、どんどん時が過ぎていくばかりでした。

昨年の一月から上級の教会へ日参をしていました。

神様に九月から修養科へとお願いしていたのですが、お許しはなく、次に十二月からと、毎日お願いするようになりました。そしてある日、私の心にふと勇気がわき、仕事先の上司に思い切ってやめることを伝えました。

すると、「やめなくていいから、それが終わったら戻っておいで」と、予想外の答えでした。「やっと神様にお引き寄せ頂いた」と実感しました。

そして、修養科へ来て、女子一人、男子二人、計三人というさみしさ、というか厳しさにどうなることかと心配でしたが、男子二人がよく動いてくれて、とても感謝しています。それに部屋が一人でさみしいけれど、気を遣うことがないので、とても楽です。

みんなから修養にならんなあと言われましたが、これも私の徳分？だと思っています。

学校では、最初なかなかみんなと話せず、とまどっていましたが、いつも一緒に行動できる友達ができ、その中の一人におさづけを取り次ぐことができました。

二ヶ月目ぐらいになると、いろんなひのきしんの場面で話すことができ、クラスのみんなと仲良く楽しく勇んでひのきしんをしています。

修養科へ来る前、人のいやがることをすることが一番の徳積みと聞いていましたので、主に本部神殿のトイレ掃除を進んでしました。トイレを使われる信者さんたちから、「いつもきれいにしてくれてありがとう」とか、「ご苦労さまです」と声を掛けられた時は、「ああ、人の喜ぶことをさせて頂いて良かったなあ」と思いました。また、修養科でしかできないひのきしんもいろいろあり、本当にいい経験になりました。風邪を引き、みんなに迷惑をかけたこともありましたが、ほとんど毎日元気に通ることができ、ありがたいなあとつくづく思います。

もう三ヶ月目に入りました。すごく早くて少々あせっています。悔いの残らないよう、何事も喜んでさせて頂き、残りの日々をしっかりつとめたいと思います。

談話室

教養掛助員として

品治分教会長　渡邉眞次

一昨年のこと、教養掛にとお電話、前出て三年も過ぎてないのにと、お断りしましたが昨年再度お電話を頂き、しかも十二月師走と聞いて驚きましたが、すべてを覚悟の上、と言いますのも、九十一才迄入院もなかった前会長が、八月末骨折、痴呆も出て手がかかるようになり、前に出ていた方が良かったと後悔した。七六四期でしたがつとめさせて頂いて、心から親神様にお礼を申し上げました。

銀杏並木も、初冬とは思えない暖かさで、どの木も秋の名残を惜しむ如く、まだ黄金色の葉を残している。今回で五回目の御用をつとめさせて頂くことになるけれど、年令も重ねて来てもう今回が最後のつとめになるように思った。有終の美を飾ることが出来ればと思いたい。

三人共若い方です。私も二六才で修了しましたが、それからの人生は、物の見方、受けとり方が変り確かに心も明るくなりました。何故もっと早く修養科へ出なかったかと思ったものです。若い方の三ヶ月は、これから通る長い人生で大変意義があり、プラスになると思います。

修養科生については何も心配ないし、健康で食事も美味しく、年中で一番日が短かい時期なので、私にとっては非常に楽でした。過去四回は暑い時でした。汗も出ないし、睡眠も充分とれましたが、只一つ、詰所の方々とにをいがけに出ましたが、一ヶ月間一度もおさづけを取次がれなかったことが、教会にいる時では考えられないことです。

でもそれも結構だったんだと思うようにしました。毎日本部神殿に参拝出来、教祖にご挨拶が出来ることは、教養掛をつとめさせて頂いている時だけです。それだけでなく、自教会の事は心配せず、御用を勇んでつとめさせて頂くことは、必ず親神様は、すばらしい御守護を下さいます。

うちも娘を修養科へ出そうかなと言ってくれたり、教会役員よふぼく、家族の成人にもつながり、パンフレット配りから、留守中日参をされる方(週五回位)がお与え頂きました。詰所のひのきしんも、年末ではあるし、する事が一杯目について、修養科生を送った後、中島主任先生と寸暇を惜しむが如く、一生懸命つとめさせて頂いたごほうびかなと、今よろこんでいます。小さい体で動いていると、修養科生が僕がやりますからと、かばって下さるのがとても嬉しく考へて見れば、一番い時につとめさせて頂くことになったんだと、思わずにはいられない。

師走もおしつまり、銀杏並木が徐々に葉が落ち枝があらわになり始める頃には、私の一ヶ月も終りに近づいて来た。落葉を踏み乍ら送って行く途中、「先生煙草止めたら」と三人の修養科生の説得に、心が動いた。どうしても止められなかった。ここで勇気を出すことは、私自身の健康にもつながる。心を決める事が出来た。有難うとお礼を述べ、最後の見送りを終えました。

詰所主任先生、詰所の方々、教養主任先生のお導びきとお力添えに、心からお礼申し上げます。修養科生には、一月二月と寒い日が続きますが、風邪を引かない様無事修了し、教祖百二十年祭仕上げの年、大切な時旬を、又これからの人生勇んだ日々で、お道の御用に励んで下さる事を祈って止みません。

結果より道中

亀田山分教会　高橋たゐ

教祖百二十年祭三年千日も残すところ一年を切りました。今まで六回の年祭活動を私の信仰レベルでつとめさせて頂いて参りました。

七〇年祭は小学生から中学生になる頃でした。父はもう出直しておりました。母につれられて心定めの貫通に日々を通らせて頂きました。私は真

実の御供として三年間学校の給食代を伏せ込ませて頂きました。昼食の時間になりますと自宅へ帰り又午後の授業を受けました。母はまだ子供だからとか、まだ信仰が未熟だからとかはありませんでした。年祭活動によって悪因縁納消又陰徳を積ませて頂くのだと。

年限が経つにつれて母の信仰心の強さ大きさをしみじみありがたく想わせて頂きます。今日私が有りますのは間違いなく母の力です。お陰様で年祭のお打ち出しを頂きますと、まず心定めさせて頂いて通らせてもらって参りました。

前会長(主人)は平成十三年、脳梗塞の身上を頂きました。脳幹の九十六パーセントが梗塞をおこしているとの診断でしたが、手足の自由をかなえて頂き、教祖の御慈悲に対して感謝の日々です。前会長は、毎日午後一時四十分、神殿回りの障子やガラス戸やカーテンなど開放してぐる〳〵歩きます。午後二時撤饌です。前会長と私は神饌場へ入ります。夫婦仲良く撤饌のひのきしんは一日も欠かしたことがありません。一時間ほど立ち詰めです。十全の守護をかみしめながら、丁寧におかたづけをさせて頂いております。

親神様の御用がさせて頂けることに、よろこびの心いっぱいです。一日でも長く信者さんに理のお取り次ぎがさせて頂けることを、陰ながら願ってやみません。

何かで読みましたが「成功より成長」とありました。成長とは他人(ひと)を救ける心だと思います。

今朝のおふでさき拝読を書かせて頂きます。

いまのみちいかなみちでもなけくなよ
さきのほんみちたのしゆでいよ　三37
しんぢつにたすけ一ぢよの心なら
なにゆハいでもしかとうけとる　三38
口さきのついしよはかりハいらんもの
しんの心にまことあるなら　三39
たん〳〵となに事にてもこのよふわ
神のからだやしやんしてみよ　三40
にんけんハみな〳〵神のかしものや
なんとをもふてつこているやら　三41
ことしにハめつらし事をはじめかけ
いまゝでしらぬ事をするぞや　三42
いまゝでハなによの事もせかいなみ
これからわかるむねのうちより　三43
このたびハたすけ一ちよにかゝるのも
わがみのためしかゝりたるうゑ　三44

教祖は「おふでさきとゆうものがありましょうがな」と仰有っています。

天の定規をあてながら、教祖と問答しつつ、残りの日時を明るく勇んで歩ませて頂きます。

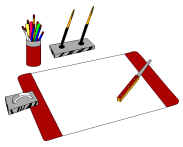
午後四時過ぎになりました。愛用のバイクで防寒対策をしっかりしておたすけに行って参ります。

・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆、②教会・布教所の独自の活動の紹介、
③俳句・和歌・川柳、④教会行事開催後の報告記事　等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）
題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。
俳句等は１句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。



郵　便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
メール：**tenkasa@kcv.ne.jp**
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

私にも何か! ー 世界たすけ ー

飯降表統領 兵庫県庁を訪問

台風災害への義援金託す

12月20日

飯降政彦表統領と宇野義明・天理教災害対策委員長は12月20日、兵庫県庁を訪問。井戸敏三知事と会見し、全教から寄せられた義援金のうちから1千万円を見舞金として手渡した。

昨年8月から10月にかけて、相次いで台風が上陸し、甚大な被害を受けた兵庫県。特に台風23号では死者26人、住宅全壊754棟など、大きな被害が発生。被害総額は、概算で2千600億円に上る。本教では同県内の10市町村に、7度にわたって災害救援ひのきしん隊が出動。被災地の復旧作業に尽力してきた。

天理教災害対策委員会では、10月末から12月31日まで救援募金を実施。全国の教友から多くの真心が寄せられた。12月10日には、このうちから3千万円を新潟県知事に、見舞金として託している。

兵庫県庁を訪れた一行は、井戸知事や関係者らと会見。井戸知事は、飯降表統領に感謝状を手渡すとともに、「多くの人々から応援を頂き、本当にありがたい。被災地復興のために力を尽くしたい」と述べた。そして、8月末の台風16号から10月の台風23号まで、相次いだ台風により兵庫県のほぼ全域で発生した被害について説明した。

なお、井戸知事は1月10日に親里を訪問、2席目の別席を運んだ。

井戸知事は飯降表統領との会談で、「天理教の方々の支援に感謝する。被災地の早期復旧・復興を一層、図っていきたい」と話した（12月20日、兵庫県庁で）

スマトラ沖地震 津波被災地の〝きょうだい〟に義援金

国際たすけあいネット――2月末まで募金受付

インドネシア・スマトラ島沖で発生した大地震によるインド洋周辺地域を襲った大津波から2週間余り。現地では、各国合計で既に15万人を超える犠牲者が報告され、今後の捜索によってその数はさらに増えるもよう。現在、110万人以上の人々が家を失うなどして避難生活を余儀なくされており、近年まれに見る大惨事となっている。こうした事態に対し、海外部（三笘薫朗部長）内にある「国際たすけあいネット」では、緊急対応策として12月29日、同ネット基金から500万円を日本赤十字社に寄託。その後も、インドネシアとタイの出張所を通して、それぞれ100万円ずつを現地の義援金受付機関に寄託した。さらに同ネットでは、基金とは別に救援募金の呼び掛けも開始。2月末まで受け付けることにしている。（11日記）

海外部では、12月26日確認と、現地の状況に関する情報収集を行ってきた。それによるとインドネシア、タイ、インドにある出張所や教会、布教所などはいずれも被災地から遠く離れており、特に影響はないとのこと。また、被災各国のようぼく・信者らの被害も、現在のところ報告されていない。

そこで、「国際たすけあいネット」では、緊急対応策として基金の一部の拠出を決定。29日、日本赤十字社に寄託。さらに30日にはインドネシア出張所に100万円を送付し、スタッフらが現地の義援金受付機関に届けた。また1月11日にはタイ出張所にも同額を送付した。

一方、両出張所内にも募金箱を設置。現地教友からは義援金だけでなく、食料品や衣類などの援助物資などが届けられている。

このほか、アメリカ伝道庁やヨーロッパ出張所、フィリピン出張所、オセアニア出張所でも教友に募金を呼び掛けるなど、被災者支援の輪が広がっている。

海外部では今後も各国の被災状況に関する情報収集を継続。今月末に部員がインドネシアとタイに出張する予定があり、被災地を視察することも検討している。

◇

なお、「国際たすけあいネット」では、今回の地震・津波被災者支援のため、2月末までの予定で募金を呼び掛けている。

詳細は次の通り。

受付期間　平成17年2月28日(月)まで

受付方法（郵便振替）

口座番号＝00920-2-152829

加入者名＝「天理教国際たすけあいネット」

※通信欄に「スマトラ沖地震支援」と明記

なお、同ネット事務局（海外部内）に直接届けることも可能。問い合わせは同ネット事務局まで。

国際たすけあいネット事務局（田中、岡本）

TEL0743-63-1511

内線5361

FAX0743-62-0227

犠牲者が10万人近くと、最も大きな被害に遭ったインドネシア。現地教友を代表してフィック・イミンさん（写真左）が、たすけあいネットから届いた義援金を地元新聞社の窓口で手渡した（4日）

スマトラ島沖地震・インド洋津波 被災者救援募金のお知らせ

天理教国際たすけあいネットでは、インドネシア・スマトラ島沖地震・インド洋津波の被災者救援のため、下記の通り義援金を募っています。

ご協力をお願いいたします。

○**受付期間**
平成17年2月28日(月)まで

○**受付方法**（郵便振替）
口座番号：00920-2-152829
加入者名：天理教国際たすけあいネット

※振替用紙の通信欄に「スマトラ島沖地震支援」と明記してください。

※国際たすけあいネット事務局（天理教海外部内）に直接お届けいただいても受け付けます。

※物品の寄付は受け付けておりません。ご了承ください。

問い合わせ先
天理教国際たすけあいネット事務局（田中、岡本）
TEL0743-63-1511　内線5361　FAX0743-62-0227
Eメール　tnet@tenrikyo.or.jp

募金集計
1月6日～17日分　26件　161万4千681円

「台風・新潟県中越大震災 災害救援募金」の報告と御礼

台風および新潟県中越大震災で甚大な被害を受けたられた方々への救援募金の呼び掛けに対し、ようぼく・信者はもちろん、広く教内外の皆さまから多大なる真実をお寄せいただき、誠にありがとうございました。

昨年10月28日から12月31日までと期間を限って、受付窓口（道友社）を開設させていただきましたが、これまでにお寄せいただきました義援金の総額は、1千886件、8千738万5千494円となりました。

このうち、12月10日には新潟県へ3千万円、20日には兵庫県へ1千万円を、飯降政彦表統領、宇野義明・災害対策委員会委員長の手で届けさせていただきました。

また、災害復興に役立てていただくため、新潟県へ3千758万5千494円、兵庫県へ1千万円を届けさせていただく予定です。

真心をお寄せいただきました皆さま方に対し、紙上を通し、厚く御礼を申し上げます。

募金総計
8千758万5千494円
（1千895件）

立教168年1月18日
天理教災害対策委員会委員長
宇野　義明

災救隊 この1年

難渋する〝きょうだい〟のもとへ

29教区隊 延べ5千324人が出動

梅雨末期の豪雨により、新潟、福島、福井の各地で水害が発生。夏から秋にかけては、観測史上最多となる10個の台風が相次いで日本列島に上陸し、西日本を中心に各地に甚大な被害をもたらした。災害救援ひのきしん隊(=災救隊、田中信行本部長)では、それぞれの被災地に駆につけ、難渋する〝きょうだい〟の復興に手を添えた。そうした中、10月2日には新潟県中越大震災が発生。観測史上初となる震度7を記録した川口町に現地本部を置いた災救隊は、関東甲信越および東北地方の各隊などに出動を求め、さまざまな活動を展開した。教祖120年祭に向かう三年千日2年目の年、各地に〝たすけあい〟の姿を映した災救隊の動きを振り返る。

台風23号

▲10月中旬に列島を縦断した台風23号は、各地に過去10年で最悪といわれる被害をもたらした。兵庫教区隊は、豊岡市や出石町など10市町に7度にわたって出動。第3次隊として応援に駆けつけた奈良、大阪、和歌山教区の合同隊は、被害の大きかった豊岡市で災害ゴミの搬出や分別などを担当した　(10月24日)

◀また、それぞれの被災地にも兵庫、京都、香川、岡山の各教区隊が出動し、住民のニーズに即した活動を展開。主に水に浸かった家財道具や廃畳を搬出した。台風23号の被災地に出動した隊員は、22日間で延べ1,085人となった　(10月30日、兵庫県西脇市で)

新潟、福島豪雨、福井豪雨

7月中旬、新潟、福島、福井は局地的な豪雨に見舞われた。被害の大きかった新潟県見附市や福井県美山町などには、18の教区隊が出動。炎暑の中で、見附市では災害ゴミの回収などを、また美山町では家屋に流入した土砂の搬出などを実施した　(7月23日、福井県美山町で)

新潟県中越大震災

震度7を記録した新潟県中越大震災では、本部隊を派遣し、川口町の魚沼分教会に現地本部を設置。22日間に13の教区隊が出動し、行政と手を取り合いながら、さまざまな救援活動を展開。本格的な冬の到来を前に、倒壊危険家屋の解体や、屋根にビニールシートをかぶせるなどの雪対策にも尽力した　(11月18日、新潟県川口町で)

台風21号

9月下旬に襲った台風21号により甚大な被害を受けた三重県海山町。三重教区隊は、町と密に連絡を取り合い、作業に必要な3トントラッククレーン1台と2トントラック5台を独自に手配。3日間の実動で、路上に出された物品や廃畳など568トンを搬出した　(10月2日)

飯降表統領 被災地新潟の県庁を訪問

全教の〝真心〟を託す

飯降政彦表統領と宇野義明・天理教災害対策委員長は10日、新潟県庁を訪問。泉田裕彦知事と会見し、全教から寄せられた義援金のうちから3千万円を見舞金として手渡した。

大規模な被害をもたらした台風や新潟県中越大震災。その後も被害の拡大が伝えられる中、各地では今も懸命な復旧作業が続けられている。それに伴い天理教災害対策委員会では、10月末から救援募金を実施。全教のようぼく・信者から、多くの真心が寄せられている。

県庁を訪れた一行は、泉田知事や関係者らと会談(写真)。前知事の辞任と泉田知事の就任の間に起きた〝災害〟に異例の登庁となったことや、地震直後の被害状況や避難所の様子などについて話を聞いた。

飯降表統領からは、災害救援ひのきしん隊が川口町を中心に展開してきた活動などを紹介。復興に向けた課題点などについて話し合った。

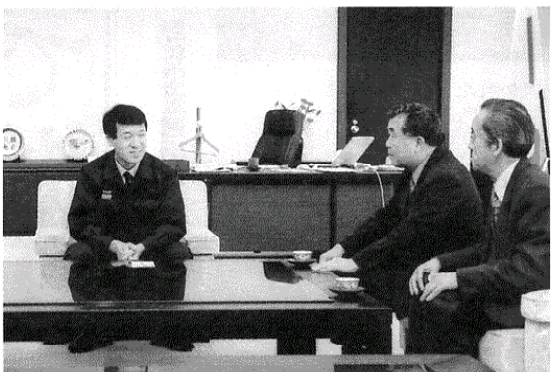
泉田知事は「多くの人にたすけていただき、本当に感謝している。一日も早く新潟が元気になるように、精いっぱい頑張りたい」と話した。

なお、20日には台風23号で被害を受けた兵庫県を訪問する予定。今後、被災を受けた各自治体へ順次、見舞金を届けることにしている。

なお、募金は12月末まで。

詳細は6面に掲載。

(13日記)



モスクワ サンクトペテルブルグ 演奏会に参加して③

大教会 岡本久善

スワロフスキー宮殿へは、市内に入り、ネバ川に架かる何本もの橋を渡りやっと到着。宮殿前のネバ川は、街並みを映してキラキラ輝き、釣りを楽しむ市民は釣り糸を垂らし、ゆったりとして流れる。その流れは、魚影の動きで初めて判る位、緩かである。

レンガ敷の舗道を横切り、案内された宮殿内の一室には、既にティーパーティーの用意がなされ、大きなテーブルに果子と飲物が並べられて居る。我々と迎えの友好協会の方々とテーブルを囲み、話に花がさく。三十分で切り上げて、演奏会の準備に全員でかかる。会場も、控の間も、レナ川に面した側は全面ステンドガラスはブルーで飾られ、その縦長の窓が、白に統一された内装に映え、又直径が一m近く、高さ八m位の白大理石の円柱も土台と天井のケタを支える部分は金張で装飾され、更に天井の空間は、キリスト教関連の物語を天使、裸婦、キューピット等で、80畳近い空間を埋めつくし描かれ、側面壁と天井部のアーチの壁面にも草花紋様で一面覆われ、その中に、館の歴代の主の人物像、胸像等が何人も見事に描かれてある。窓、壁、天井、柱、その上頭上のシャンデリアの豪華さと、完璧なまでに装飾され、フロアーは、モザイク文様が木片で、はめ込まれ、組まれてある。

私は、こんな空間に長時間居ると、徐々に肩に血液が集中、疲れを感ずる。完璧なまでの美しさが、私を圧するのであろう。こう云う時はトイレが一番安心する場所であるが、こゝの便器が又変わって居り、日本人には少々高く、ラッパ型の受け口に勢いを圧えて、カゝトを上げて用を足すことになる。私はおかげで不便さはない。私には土の壁と、障子と木の香りが一番の安らぎの空間である。日本人を実感する。

開演を前に既に多くの人々が入場、150席～200席の会場はほぼ満席となる。定刻六時、日露友好協会会長挨拶、曽山先生の流暢なロシア語での挨拶に続いて、演奏曲の説明、天理教の紹介があり、約二時間近く、管弦三曲、舞楽二曲を演じて無事了る。友好色が強く、少々子供さんの入場者の多いだけ、雑音が気になった。

斯くして、夜十時、サンクトペテルブルグ郊外、モスクワでもないのに「モスクワホテル」に入る。何さま新しく大きな建物でロビーから私の部屋までゆうに五分を要する。ロビーが百五十畳位あり、

中央アジアの人々、中国人、ヨーロッパ各国からの観光客と、正しく人種の坩堝の感がある。私は、例の如く室の鍵を手に、大きな荷物と共に七階の部屋に入り、早々に休む。若い人々は、社長のおごりでクラブで楽しい夜を過したとのこと。

翌朝五時前に目覚めると、外は未だ真暗、ゆったりと部屋で過して、朝食を待つ。九時薄明りの中、ロビーに下りて、玄関前に出ると、左右に走る大きな道路にトローリバス、電車の架線がやけに目に付く。その向うに、葉を落した木立の林が見える。聞くと、ロシア正教の修道院とのこと。広大な寺院は、甲子園六ヶ分位はあるとのこと。小山も林も沢山あり枯れた林立に囲まれ、静かな環境の修道院である。

今日は、ロシア最大の刑務所での演奏会とのこと、会場が狭い為、楽人の服装は各自の教会のハッピを着用とのことで、ホテル出発は十時過ぎ、十一時、フィンランド湾に注ぎ込むネバ川のほとり、川に沿った長い〳〵刑務所の壁が続く中、会場に一番近い門より入る。八千人の収容者は、ロシア最大であり、刑務所の警備は厳重である。入口は、逃亡防止の為か狭い。細長い通路に並び、一人ずつパスポートを提示し確認を了えると、重く厚いドアを押して一人ずつ入る。その時の重いドアの音が今も耳に残って居る。斯く二つのゲートを越えて、やっと中庭に出る。演奏会場といっても、鉄の格子入りの小さな窓が二ッあり、薄汚れた壁がやけに目につく。百畳程の部屋を客席と舞台に分けただけである。会場には優秀な受刑者五十名が観客である。開演が近づくと、俄に賑やかとなる。何かと思うと、テレビ局五社がスタッフをつれて来場。テレビライトが室内をやけに明るくしてくれる。例の如く演奏会は、一時間三十分。曽山氏のロシア語の説明も堂々と又、会終了時、テレビインタビューに応へる堂々たる態度、ロシア語。こう云う場面では、彼の鼻の下のヒゲが立派に見えるものである。終えて、刑務所内食堂にて、所長の招待昼食会が持たれる。所長特命にて酒、灰皿も用意され、ロシア料理がふるまわれる。早々に、ロシア民謡の合唱となり、女性の刑務官も制服のまゝ加わり、肩を組んでの大合唱。一昔前の日本の歌声喫茶の如き様相雰囲気にて、大変楽しい思いもよらぬ楽しい一時を刑務所の食堂で過し、最后に所長を囲み、記念写真を撮り終へて、大勢の見送を受けて、塀の外に出る。午后は、時間のゆるす限り、ロシアを代表するエミルタージュ美術館の美術鑑賞、王、貴族のコレクション、特に絵画は、ヨーロッパ諸国の有名画家の作品が数多く貯蔵、展示されてある。楽しみだ。（以下、次号に続く）

明鏡止水

浮々と

何気なく古いアルバムを繰ってゐると、奇しくも、前会長(宮本友二さん)が、団体列車のまん中で、ハンドマイクを握って歌を唄っておられるのが目に入りました。恐らく教祖八十年祭の頃だろうと思います。滅多に見られない姿です。十二両編成の団体列車の中です。大勢の方が参加して下さった中で、主人は嬉しそうな笑顔いっぱいです。

私は急に懐しさが込み上げて来ました。主な役員さんや信者さんが、懸命にさそって下さった未信の方が殆んどです。一両半位でしょうか。

丁度教祖八十年祭の歌が新曲として唄はれ、手ぶりもついてゐました。元気よい勇んだ歌で＝サァサァ来た来た旬が来た、八十年振りに旬が来た、老いも若きも＝と歌は流れて行きます。更に加えて〝なかま音頭〟が発表され、快いメロデーで＝ハァーみんななかまだ明るさを、求めてくらす人間の仲間同士の間柄サテ＝どちらも明るくて、品位があって、唄い易く、心が浮々とする唄です。

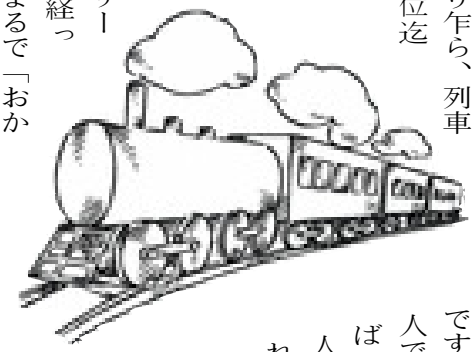
私達女性軍は、こうした歌をおどり乍ら、列車の通路にしかれたゴザの上を三両位迄踊って歩いたものでした。

此の歌詩は兵神大教会の前会長様の作で、兵神系生れの私はお会いすると、「元気でやってるか」と暖い言葉をかけて下さり、このなかま音頭を刻を忘れて歌った思い出が懐しく映画のストーリーの様に思い出されます。三、四十年経った今でも口づさむのはこの歌です。まるで「おかあさんのおっぱい」の様な暖さで心が慰められるのです。

あの頃は勇んでゐたなー。団参にも順次参加して下さり賑やかだった、三泊四日のお地場参拝でした。

さて、今年は教祖百二十年祭三年千日終りの年です。年令も八十才を越え、足腰も弱ったけれど「教祖が手を差し出して待ってゐて下さるのです」。

年と共に成長せなければならないのに、どう云う事です。動かなければ答えは出ない事もわかっているし、お地場からは事細かになす可き道を細々とお示し下さってゐます。飛んではねて踊らなくても心がおどればよいのです、勇めば良いのです。私はゆるんでいゐた心を恥じ一人でもと、孫の顔を見る度に、おぢばの話や別席の話をしています。一人から二人三人と連なって行けばこれ以上の事はありません。そうなって行く様にと朝夕お願いをしています。



先日、教会の役員さんの奥さんが以前から身上だったのですが、次第に弱って息もたえだえになられました。私も呼ばれました。

アッ、アッ、アー。ご主人が急いでおさづけを取つがれました。

シーンと静まり返った部屋の中で、少しづゝ息を吹き返されました。涙が、まなじりを伝います。おかげを頂かれたのです。今では少しづゝ快復され食事も少しは頂かれるようになられました。

地場からは「おさづけの取次」とか、げて下さってゐるのです。

私はおさづけのありがたさを目のあたりにお見せ頂きました。匂いがけおたすけの最后は「おさづけの取次」の一言につきるのだなー、と腹の底にしみ〴〵と感じ入ってゐる次第です。

（宮　本　おふさ）

こころの詩

▼養徳社発行『陽気』誌二月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「覚」、選五十六句中、笠岡に繋がる教友の方二名、二句が見事選ばれ掲載されていました。さらに、「平成十六年度年間賞」選三句中に左記の一句が選ばれましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

秀　詠　東悠分教会長夫人　田林　美智子

月次祭何やら嬉し目覚めかな

佳　詠　芳阪布教所長夫人　杉原　優子

覚悟定め車内さづけに顔燃ゆる

年間賞　東悠分教会長夫人　田林　美智子

琴柱(ことじ)立て
月次祭を
待つ朝(あした)

受賞の盾を抱く田林さん

▼病喜録のうた　東濱　十三雄

天災と　北鮮　イラクに　言葉　無く
静かに　年は　改まりたる

夜の汽笛　凍った様に　聞こえ来る
熱き心を　取り戻さねば

明けましたのるかそるかの此年を
立ちひるまずにひながた求め

▼ふたつがひとつ　詩　かくしん

一、夫婦ってなんだろうね
男と女の求め合い
プラスマイナス求めてはねて
天と地とのたすけあい

二、南極、北極自然界
暑さ寒さの一年を
耐えてよろこびすぎゆきて
春の陽気に秋景色

三、ぬくみと水気で作物そだつ
月日のめぐみうるわしく
つく息ひく息健康で
生かされている今うれし

▼続道中詩　油木分教会　黒瀬　修弍

晴れの日も曇る日もあり雨の日も
心も同じ傘を用いて

勇もうと思う心も沈む時
無理せず受けよ親の温もり

愛言葉深く心にしみわたる
神の心にふれる喜び

有難き教祖(をや)を頂く身に在りて
使命果しと今日も勇々

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原理一慎んで申し上げます

親神様には一列子供の「よふきゆさんがみたいゆへから」とこの世と人間をお創造(はじめ)になり十全の御守護でお育て下さると共に天保九年には教祖を月日のやしろとお定めになり直々この世の表にお現れになり陽気ぐらしへ向かうひながたをお示し下さいました　更には明治二十年二十五年先の定命を縮めてまで御身をお隠しになりろっくの地に踏み均しに出られて陽気ぐらしへとお導き下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます　私共はそのご恩に応えるべく日々は朝夕に御礼申し上げつつお導きのままに世界だすけの御用の上に勇んで勤め励ませて頂いております

その中でもこの月二十六日が一列子供の成人を急き込まれて世界だすけに踏み出された尊い日柄でございますのでおぢばでは春の大祭が執り行われますがこの笠岡にても理のお許しを頂いて只今からおつとめ奉仕者一同たすけ心も一入に明るく陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめて春の大祭を執り行なわせて頂きます　御前には折柄の寒さ厳しき中も厭いませず今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和し同じ思いに伏し拝み真実込めて御礼申し上げる状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて教祖百二十年祭に向け三年千日と仕切って歩んでまいりました成人の道も残すところあと一年　いよいよ仕上げの年となりました　思い返せば十年前と昨年と「ぢしんをふかぜ水つき」を通して「月日のざねんりいふく」をお見せ頂いておりますがいずれも年祭の旬に当たることからよふぼくの成人の鈍さに対する残念立腹と思案させて頂きます　その上から実動そのものに重きを置いていた年祭活動から実動によって結果を出す活動とすべく「全教会一名以上の初席者を御守護頂こう」と申し合わさせて頂きました　特に以上という点に重きを置いてそれを実現する為に全よふぼくが初席者を必ず御守護頂く覚悟で勤め切らせて頂いて仕上げの年にふさわしい成人をさせて頂く所存でございます

何卒親神様には成ってくる理に思案を重ね明治二十年に一列子供の陽気ぐらしをよふぼくに託された親心に応えるべくたすけ一条の成人の道を歩む皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして万たすけの上に尚も自由の御守護を賜り人々の心を助け合いの心へと立て替えて下さいまして年祭にふさわしい心の成人が出来ると共に一日も早くお望み下さる陽気づくめの世界へとお導き下さいますよう一同と共に慎んでお願い申し上げます

▼生きること

笠東布教所　小学校五年　常井康代

生きるってどんなことだろう。
そんなこと，いつも考えていなかった。
私たちは，そんなことを考えずに，自分の心をきずつけて，きずつけ合っていた。

命とは，何だろう。
そんなこと，いつも考えていなかった。
命は，一人に一つしかない物。
そんな命を，むだにする人がいる。
心をきずつけるだけじゃなく，人の命まできずつける人もいる。自分できずつける人もいる。

でも、私はこう思う。
きずついても，きずつけられても，ずっと，ずっと，生きていく仲間だから，ゆるし合って、助け合って生きていこう。

◆にをいがけ・おたすけ実修会　要員研修会

【日　　時】　３月２０日　午後０時４０分 受付、１時 開講、５時 閉講
【場　　所】　笠岡大教会　講堂
【講　　師】　大教会長様
【内　　容】　講義「別席について」、にをいがけ実修（ドリル）
【対　　象】　実修会要員
【服　　装】　ハッピ着用

◆立教168年　春の学生おぢばがえり

【趣　　旨】　道につながる学生が、一人でも多くの友とおぢばに帰り集い、真柱様のお言葉を心に治め、教祖120年祭に向けて、今後の成人を誓い合う。
【テ ー マ】　友とおぢばへ　～ １万人への決意を ～
【期　　日】　立教168年（平成17年）３月２８日（月）
【内　　容】　・式　　典 …… 午前　９時　（本部中庭）
「真柱様お言葉」
・直属アワー …… 午前１１時　（笠岡詰所）
・別　　席 …… 正午より受付
・後夜祭『春まつり』　… 夕つとめ後　（東西泉水プール前広場）
【参加対象】　高校生（新１年生を含む）、大学生、短大生、大学院生、専門学校生など
＊各教区で、団参を計画しているので、それをご利用の上、ご参加ください。
尚、ご不明な点、お問い合わせは、笠岡 学生担当委員会 吉岡まで。

◆鼓笛バンド講習会

【日　　時】　３月３１日（木）～４月２日（土）２泊３日
【内　　容】　お供え演奏曲の練習･修得、
お楽しみ行事（室内オリンピック等）
＊４月２日は、少年会おつとめ総会へも参加します。

◆少年会笠岡団　おつとめまなび総会

【日　　時】　平成１７年４月２日（土）午前９時受付、９時半開会、午後３時閉会
【内　　容】　午前　おつとめまなび、総会式典、若木門出式
午後　お楽しみ行事（ゲーム、スーパーボールすくい他）
【参加御供】　各隊　１，０００円
【服　　装】　ハッピ、学校のズボン･スカート、白い靴下、なお祭儀式をつとめる人はおつとめ衣。
◎各隊からの少年会員が日頃のおつとめまなびの成果を、親神さま･おやさまにご覧頂く年に一度の総会です。大勢の参加をお待ちしております。
会長さん･奥さん、この機会に「教会おとまり会」などで少年会員におつとめの大切さを教え、おつとめの練習をよろしくお願い致します。

◆各行事に参加ご希望の方は、
各ブロックの担当者にお申し込みください

実践項目集計（12月）

百万軒にをいがけ	57,382軒
おさづけのお取次	4,204回
身上事情お願い	797件
提出教会	115ヶ所

実践項目集計（立教167年集計）

百万軒にをいがけ	806,917軒
おさづけのお取次	55,598回
身上事情お願い	10,520件

大教会だより

◎教会長資格検定講習会修了者

前期　立教168年2月14日終講

瑞雲　豊田俊美

◎本部食堂ひのきしん

自　立教168年2月1日

至　立教168年2月28日

芳井　山口晃治

訃報

阪本末子姉

大教会おつとめ奉仕者

二月十五日出直されました。

享年　九十六才

名言&迷言

私にとっての三年千日仕上げの年である立教百六十八年は、「人づくりの心定め完遂」「教会よふぼく、信者の身上・事情への対処」「家族の絆の緊密化」の上から、今までと違う自分の遂行力と神のご守護を頂かねばならないと思い、先人に習い、一月十三日、煙草断ち(禁煙)の願掛けをしました。

一日四、五十本(二十分に一本位)のペースで吸っていましたので、今、禁煙後一ヶ月程しか経過してません故、「どうぞ」と勧められると、おもわず手が出るのでは、と心配しています。禁煙は、過去なんども試みてきましたが、最長一年半が最高でした。今までの禁煙は、煙草代替品(飴、昆布、ガム、禁煙パイプなど)に頼ってきましたが、代替品では、どうしても本物を意識するので、今回は、根性だけで禁煙を実行しようと思っています。こんな強気を吐いていますが、食後や祭文などの考え事をしている時は、いまだに、物凄く吸いたくなります。

あれは、丁度禁煙十日目でした。食後堪らなく吸いたくなって、一箱だけと思い、自販機へ走り、千円札を入れたが、何回入れても、お札は戻るばかり、新千札の使えぬ自販機でした。これは、親神様が本気で私の禁煙を守護下されていると悟り、以降自販機と決別することにしました。そして吸いたい時は、唾液を三回飲み込むことにしています。

紫煙のなかで、唾液を飲み込んで、我慢している慎ましい姿を見かけたら、「頑張れ」と、声なき声を掛けて、本人の願掛け成就を祈念してやってください。

（さ）